

第一章…甘い誘惑と、はだける浴衣のその隙間に

老舗旅館特有の、畳とい草の香りが鼻腔をくすぐる。

案内された離れの客室は、二人で過ごすには贅沢すぎるほど広かった。けれど、僕の隣に立つ彼女——トリニティ総合学園、正義実現委員会副委員長の羽川ハスミの存在感を考えれば、これくらいが丁度いいのかもしれない。

「……ふう。やっと着きましたね、先生」

重厚な木の扉が閉まり、仲居さんが下がった途端、ハスミが大きな漆黒の翼をバサリと広げた。

緊張の糸が切れたのか、彼女はほっとしたように息を吐く。「このセンチという長身に、その翼。そして何より、正義実現委員会の制服ですら隠しきれなかった、あの暴力的なまでの身体の凹凸。

部屋の空気が、彼女の甘い匂いで一瞬にして塗り替えられた気がした。

「長旅、お疲れ様。翼、窮屈だった？」



「ええ、少し。……でも、先生との旅行ですから。これくらいのお我慢はなんてことありません」

ハスミは凍とした表情でそう言いながらも、頬をほんのりと朱に染めている。

普段はあんなに威厳ある副委員長なのに、こうして二人きりになると、途端に年相応の——いや、それ以上に無防備な少女の顔を見せるからずるい。

「あ」

不意に、ハスミの視線が一点に釘付けになった。

視線の先にあるのは、ローテーブルの上に置かれた「ウエルカムスイーツ」。この旅館名物の、餡がたっぷり詰まった温泉饅頭だ。湯気を模したようなふつくらとした皮が、実に美味しそうに艶めいている。

「……美味しそう、ですね」

「食べる？」



「い、いえ！ ダメです！ 今、絶賛ダイエット中なんです。先日 の身体測定で、その……少しだけ、あくまで少しだけですが、数値が増えてしまつて……」

ハスミはぶんぶんと首を横に振る。その拍子に、豊かな黒髪と、服の上からでも主張の激しい胸がたぶん、と大きく揺れた。重力という概念が彼女の胸元にだけ強く働いているかのようだ。

「でも、せつかくの旅行だよ？ ここで食べなきゃ、旅館の人にも悪いし」

「うう……それは、正論ですが……」

「半分こしようか」

僕が饅頭を手に取り、半分に割って差し出すと、ハスミの瞳が潤んだ。理性が食欲と葛藤し、そしてあっけなく陥落する音が聞こえた気がした。

「……先生がそこまでおっしゃるなら、無下にはできませんね。……あーん、してくださいますか？」



彼女は少し身を屈め、僕の顔を覗き込んでくる。

恥じらいながらも口を開けるその仕草は、小動物のようっていて、どこか妖艶だ。

指先で摘まんだ饅頭を口元へ運ぶ。ハスミはパクリとそれを啜え、咀嚼するたびに幸せそうな吐息を漏らした。

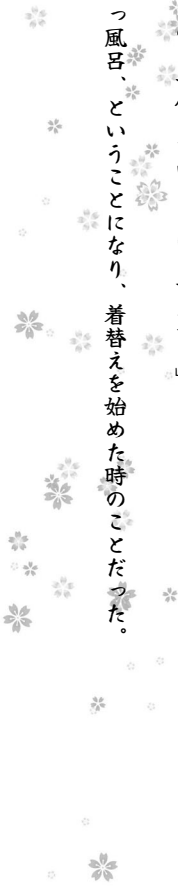
「ん……っ、甘い……。美味しいです、先生」

口元についた餡を指で拭ってあげると、彼女は熱っぽい瞳で僕を見つめ返してきた。まだ何もしていないのに、部屋の湿度が湿度を帯びて上がっていくようだ。



「……先生。その、手伝っていただけませんか？」

夕食前のひとつ風呂、ということになり、着替えを始めた時のことだった。



衝立の向こうから、困り果てたようなハスミの声が聞こえてきた。

許可を得て衝立を回り込むと、そこには浴衣を羽織り、帯を手に持ったまま立ち尽くすハスミの姿があった。

「サイズが……合わないんです」

彼女は泣きそうな顔で訴える。

旅館側には事前にサイズを伝えて特注サイズを用意してもらったはずだ。丈は合っている。問題は、そこではなかった。

「胸が……つかえて、前が閉まらなくて」

見れば、豊かな双丘が浴衣の合わせ目を強引に押し広げようとしていた。

サラシを巻いているわけでもない無防備な胸元は、浴衣の生地ごときては到底抑え込めない。動いたびに、はだけた襟元から白くなめらかな谷間が露わになり、その奥にある淡い色の頂すら見えてしまいそうだ。



それに加えて、背中の翼だ。浴衣の背中部分には翼を通すスリットがないため、彼女は翼を小さく畳んで無理やり生地の中に収めているが、そのせいで帯を回すのが至難の業になっていた。

「後ろ、僕が結ぶよ」

「すみません……お願いします。……なんだか、恥ずかしいです」

ハスミの背後に回る。

薄い浴衣越しに、彼女の高い体温が伝わってくる。

翼の根元を避けるように帯を通し、前へ回す。どうしても身体が密着してしまふ。僕の腕が彼女の腰に回されると、ハスミは「ひゃう」と可愛らしい声を漏らして身を震わせた。

「先生、くすぐったいです……」

「ごめん、もう少しだから」

帯を締めるために少し力を込めると、反動で彼女の背中が僕の胸板に押し付けられた。

柔らかい。そして、大きい。

ハスミの吐息が荒くなり、甘い香りが強くなる。

帯を結び終え、前へ回って襟元を整えようとしたが、やはりその規格外のバストが邪魔をして、完全には閉まらない。

「……もう、これ以上は無理みたいです」

ハスミは諦めたように苦笑し、自身の胸元を隠すように腕を添えた。だが、その動作がかえって胸のボリュームを強調し、谷間を深く刻み込んでいることに、彼女は気づいているのだろうか。

普段の制服や体操服姿も破壊力抜群だが、湯浴み前の、乱れた浴衣姿のハスミは、理性を焼き切るには十分すぎるほどの毒を含んでいた。

「先生……？ そんなに見つめられると、私……」

ハスミが潤んだ瞳で見上げてくる。



「あなた」とも「きみ」とも呼ばない。ただ「先生」と呼ぶその響きに、絶対的な信頼と、それ以上の湿った感情が込められている。

彼女は一步、僕に近づいた。

身長差があるはずなのに、圧迫感はない。あるのは、包み込まれるような母性と、焦がれるような恋情だけ。

「温泉、行きましょうか。……それとも」

ハスミの指先が、僕の浴衣の襟に触れる。

その指は微かに震えていた。

正義実現委員会の副委員長としての顔はもうない。ここにいるのは、ただ好きな人に触れてほしいと願う、一人の女性だ。

「……ふふ、冗談です。まずは汗を流しましょう？ 先生にとつても、私にとつても、長い夜になりそうですから」



彼女は悪戯っぽく微笑むと、僕の手をぎゅっと握りしめた。その手は熱く、しつとりと汗ばんでいる。

露天風呂への回廊を歩きながら、僕は確信していた。

今夜、この真面目で食いしん坊な彼女を、骨の髄まで愛で尽くすことになるだろうと。浴衣の裾から覗く白く長い脚と、揺れる黒い翼を見つめながら、僕は握り返した手に少しだけ力を込めた。

第10章…湯煙に溶ける理性、甘やかなる母性の檻

露天風呂に満ちる湯気は、まるで私たちを現世から切り離す白い帳のようだった。

岩造りの湯船。源泉かけ流しの湯がこんこんと湧き出る音と、遠くで鳴く虫の声だけが聞こえる。

本来なら風流を感じるべきその空間は今、むせ返るような甘い熱気と、水音、そして抑えきれない嬌声によって支配されていた。

「……………つ、あ……………ふ、う……………つ！先生……………だ、だめ、です……………そんなに見ない……………」

湯船の縁に背中を預けたハスミが、大きな翼をバシヤリと震わせる。

湯に濡れた黒髪が白い肌には張り付き、湯気で上気した頬は、熟れた果実のように赤く染まっていた。

彼女は必死に両腕で自身の体を隠そうとしているけれど、その豊かな肢体は隠しきれぬものではない。

お湯の中に沈んでいるはずなのに、規格外の大きさを持つ双丘は、浮力と重力の狭間でたゆたい、その半分以上が水面からこぼれ落ちてしまっている。

白い肌に透明な湯の膜が張り、先端の桜色は恥ずかしそうに、けれど主張するように硬く尖り始めていた。

「隠さなくていいよ。すごく綺麗だ」

「き、綺麗だなんて……ただ大きいだけで、太ってるみたいで……っ、んんっ!？」

言葉の途中で、僕が距離を詰めたからだ。

お湯の中で肌と肌が触れ合う。



彼女の太ももに僕の足が触れると、ハスミはビクリと身体を跳ねさせ、逃げ場のない湯船の中で身を小さく縮こまらせた。

「先生、近いです……っ、顔が……」

至近距離で見つめ合う。

濡れた瞳が潤み、視線が彷徨う。

正義実現委員会の副委員長として振る舞う時の、あの威厳ある表情はどこにもない。あるのは、雄を前にして戸惑い、期待し、渴望する雌の顔だけだ。

「……ずるい、です。そんな顔をされたら、私……断れません」

彼女が観念したように目を閉じた瞬間、唇を重ねた。

触れるだけのキスではない。互いの存在を確かめ合うような、深く、濃密な口づけ。

「ん……っ、あ……ちゅ……れる……っ」



舌先が触れ合うと、ハスミの喉から甘い鳴き声が漏れる。

彼女の大きな手が、縋るように僕の肩を掴んだ。

長い指が背中に食い込む。

口内を蹂躪し、唾液を混ぜ合わせる。彼女が好むスイーツのように甘く、そして脳が痺れるような熱い味。

息継ぎのために一度唇を離すと、二人の間に銀色の糸がとろりと引いた。

「はあ、はあ……っ、先生……頭、くらくらしめます……のぼせたわけじゃ、ないのに……」

とろんとした瞳で見つめてくるハスミ。

その無防備な胸元に、僕はゆっくりと手を伸ばした。

水面を割り、たぶん、と重みのある感触が掌を満たす。

「ひゃうっ!？」



ハスミが可愛らしい悲鳴を上げた。

片手では到底収まりきらない。指を大きく広げても、その柔らかな肉の塊は指の隙間から溢れ出てしまう。

マシユマロよりも柔らかく、水風船のように張りがあり、何より——熱い。

「お、おっきい……ですよね……ごめんなさい……っ」

「謝ることなんてない。最高だよ」

「っ、あ……！　そこ、揉まないで……っ、んああっ！」

掌で包み込み、重さを確かめるように揉みしだく。

指先が先端を掠めるたびに、ハスミの背中が弓なりに反り、バシヤバシヤと湯面が波打った。

濡れた翼が大きく広がり、水しぶきを上げる。

「声、漏れてるよ」

「だ、だって……っ、先生のいじり方が……いやらしい、から……っ！　んくう……っ、奥

まで、響いて……」

彼女は恥じらいながらも、拒絶はしない。

むしろ、もっと触れてほしいと訴えるように、無意識に胸を突き出してくる。真面目な彼女の中にある、抑圧された性欲のスイッチが入っていくのがわかる。

「ハスミ、こっちに来て」

「……はい……先生……」

僕は湯船の中の段差に腰掛け、ハスミを自身の太ももの上に抱き寄せた。

対面座位の形。

「6センチの彼女が上に乗ると、その圧倒的なポリウム感に視界が埋め尽くされる。目の前には、湯気をまとった極上の果実。

我慢できず、僕はその片方に顔を埋めた。

「ひゃあっ!? せ、先生……っ、そこは……!!」



言葉など聞かず、先端を口に含み、強く吸い上げる。

舌先で転がし、赤ちゃんのよう食ると、ハスミの喉から声にならない絶叫が上がった。

「ああっ！だ、だめえ……っ！吸っちゃ、やあ……っ！ん、んんっ！！」

ハスミが僕の頭を抱え込む。

拒絶ではない。まるで我が子に乳を含ませる母親のように、愛おしそうに、そして快楽に耐えるように、僕の頭をその豊かな胸に押し付けてくるのだ。

（ああ……先生が、私の胸を……食べてる……）

ハスミの思考が白く染まっていく。

甘いものが大好きな彼女が、今は自分自身が「甘いもの」として先生に貪られている。

その事実には、背徳感と征服感が入り混じった強烈な快感が背骨を駆け上がった。

ちゅぽ、じゅる、と卑猥な水音が湯殿に響く。



「んあ、あ……っ、すご……吸う力、つよい……っ！ ああっ、変な汁……でちやいそう……っ！」

実際には母乳など出るはずもないのに、先生の熱心な舌使いに、体内で何かが生成され、溢れ出しそうな錯覚に陥る。

胸の奥がきゅんきゅん疼き、その刺激が下腹部へと直結しているのがわかる。

「先生……先生え……っ、もつと……もつと吸ってください……っ、私の全部、先生にあげますから……っ」

ハスミの瞳から生理的な涙がこぼれ落ちる。

彼女はもう、恥じらいなど捨て去っていた。

僕の後頭部を優しく撫で、時折、髪をくしゃりと掴みながら、恍惚の表情で天井を仰ぐ。

「おいしい……ですか？ 先生……」



口を離し、唾液に濡れて光る先端を見上げると、ハスミはとろけきった笑顔で問いかけてきた。

普段のストイックな副委員長とは別人の、慈愛と淫靡さに満ちた「女」の顔。

「うん、甘くて最高に美味しい」

「……ふふ、よかった。……私、先生の栄養になれるなら……なんだって、します……」

彼女はそう言うと、今度は自ら反対側の胸を差し出し、僕の唇に押し付けてきた。健啖家である彼女が、食われる側になる喜びを知ってしまった瞬間だった。

「ん……っ、あ……はあ……っ。先生、もう……お風呂、無理かも……」

しばらく夢中で貪り合った後、ハスミが荒い息を吐きながら僕の肩にもたれかかった。

お湯の熱さと、情欲の熱さで、二人の体温は限界まで上昇している。

濡れた肌と肌が滑り合い、下腹部が硬く触れ合う感触に、ハスミの腰がピクピクと反応していた。



「……部屋に、戻ろうか」

「……はい。……続き、ベッドで……もっと、いっぱいちゃいちゃ、してください……」

耳元で囁かれたその声は、砂糖菓子よりも甘く、そしてどんな命令よりも抗いがたい誘惑の響きを持っていた。

ふらつく足取りの彼女を支えながら湯船を出る。

濡れた翼から滴り落ちる雫が、これからの長い夜の始まりを告げているようだった。

第〇章…暴食の甘い罠、肉の海に溺れて

部屋に戻ると、敷かれたばかりの布団が私たちを待っていた。

湯冷めしないようにと、ハスミは浴衣を羽織り直していたけれど、その帯はもう結ばれていない。

はだけた前からは、湯上りの火照りを残したままの、圧倒的な質量の果実がこぼれ落ちそうに揺れている。



「……先生。もう、待ちきれません」

ハスミが私を布団に押し倒す。

「6センチの長身と、漆黒の翼が私を覆い隠すように広がった。

天井の照明が彼女の翼で遮られ、視界が薄暗くなる。そこは、ハスミと私だけの閉じた世界だった。

「さっきのお風呂……あんなに少しじゃ、全然足りなかったんです。私のお腹、まだべこべこで……」

彼女の瞳が、獲物を狙う肉食獣のように、それでいてお菓子をねだる子供のようによく光る。

ハスミの大きく温かい手が、私の下腹部に這い寄った。

浴衣の裾から伸びた指先が、熱を持った中心に触れる。

「……っ、ふふ。先生、もうこんなに元気なんですわね」



彼女は愛おしそうに呟くと、ゆっくりとそれを掌で包み込んだ。

大きい。彼女の手は女性にしては大きい方だが、それでも包容力あふれるその指使いは繊細だ。

上下に擦り上げられるたびに、ごつごつとした指の関節と、柔らかい掌の肉感が交互に刺激を与えてくる。

「ん……っ、どうですか？ 私の手……」

熱い吐息が耳にかかる。

視線を落とすと、ハスミが上気した顔で、手元の動きをじっと見つめていた。

「先生のここ、脈打ってます……。私の手の中で、ビクビクって……かわいい」

彼女はリズムを速める。

時折、親指の腹で先端を円を描くように撫で回し、溢れ出る先走りを塗り広げるように絡

めとる。

ぬちゅ、と卑猥な水音が響くたび、ハスミの喉がゴクリと鳴った。

「……だめ。手だけじゃ、私*が*我慢できません」

ハスミが身を乗り出した。

彼女の顔が股間に近づく。

長い黒髪がカーテンのように垂れ下がり、その隙間から、潤んだ瞳と開かれた唇が見えた。

「いただきます……先生」

ためらいなく、彼女はそれを口内に招き入れた。

温かい。いや、熱い。

口腔内の粘膜が、形に合わせて吸い付いてくる。

ハスミの舌は、極上のスイーツを味わう時のように、丹念に、そして貪欲に動き回った。



「んむ……っ、ちゅ、る……れる……っ」

頭を前後に動かすたびに、彼女の長い睫毛が揺れる。頬がこけ、バキュームのような吸引力が襲い掛かる。

「健啖家」の彼女にとつて、これは食事なのだ。理性を溶かす、最高の夜食。

「ぶはっ……！！はあ、はあ……っ、先生の味……濃厚で、甘いです……」

一度口を離すと、銀色の糸がダラリと伸びて、彼女の顎を濡らした。

ハスミはその汚れを気にするどころか、舌でペロリと舐め取り、妖艶に微笑む。

「でも……もつと、もつと味わいたいです。先生の全部を、私の中に……」

ハスミが上体を起こし、浴衣を肩から滑り落とす。

露わになったのは、重力に逆らうことを諦めたような、巨大で柔らかな双丘。彼女は四つん這いになり、私の上に覆いかぶさった。



「……見えなくなっちゃいますよ？ 先生」

言葉通り、視界のすべてが肌色に埋め尽くされた。

ムニユン、という重苦しいほどの感触と共に、顔も、胸も、そして下半身も、彼女の豊満な肉体に沈んでいく。

特に下半身は、二つの巨大な山の谷間に完全に捕らえられていた。

「んっ……あ……！ きつい、ですか……？ でも、我慢してくださいね」

ハスミが腰を振る。

左右の胸肉が、プレス機のように中心を挟み込み、圧迫する。

柔らかいのに、逃げ場がない。

肌と肌が擦れ合い、汗とローション代わりの唾液が混ざり合い、ぬめぬめとした快感を生み出す。



「あつ、んんっ！ 先生……っ、硬い……っ！ 私の胸、潰されちゃいそう……っ！」

ハスミが喘ぐ。

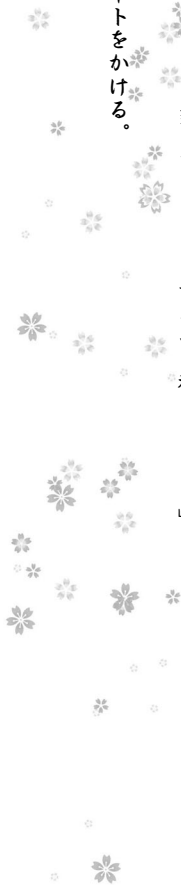
彼女にとつても、敏感な胸の内側を硬いもので擦り上げられるのは強烈な刺激らしい。大きな翼がバサバサとシーツを叩き、彼女の興奮を伝えてくる。

「ああっ、いい……っ！ 先生と、繋がってる……っ！ 挿れてないのに、奥まで……響く……っ！」

彼女は自分の胸を両手で抱え込み、さらに強く押し付けてくる。視界に見えるのは、快楽に歪むハスミの顔と、揺れる巨乳だけ。圧迫感と熱量、そして視覚的な暴力に、理性の堤防が決壊寸前になる。

「先生、先生……っ！ 出して……っ！ ぜんぶ、私に……っ！」

彼女がスパートをかける。



高速で振られる腰、締め付けられる胸の谷間。限界が訪れる。

「っ、出る……!!」

「はい……っ！ ください……先生の、ぜんぶ……っ！！」

ハスミは動きを止めず、むしろ吸い出すように胸を押し付け、同時に口を開けて待ち構えた。

白濁した熱い衝動が、勢いよく放たれる。

彼女の顔に、胸に、そして口の中に。

「んっ……!!」

ハスミは一滴も逃さないように口で受け止め、喉を鳴らして飲み干した。

ビクビクと脈打つ余韻がおさまるまで、彼女は愛おしそうに舐め続け、掃除をしていく。



「…………ごっくん」

喉が大きく上下し、すべてが彼女の胃袋へと収められた。

ハスミは口元を手の甲で拭い、満足げに、そして少し恥ずかしそうに頬を染めて笑った。

「…………ふふ。ごちそうさまでした、先生」

彼女の口元には、まだ白濁が少し残っている。

その背徳的で淫靡な姿は、正義実現委員会の副委員長とは到底思えない。でも、これが彼女の本質なのだ。

私のために理性を捨て、欲望のままに食ってくれる、愛すべき共犯者。

「…………でも、先生？」

ハスミが再び、濡れた瞳で私を見下ろす。

その瞳の奥には、まだ消えていない飢餓感が揺らめいていた。



「デザートは、別腹ですよね？ ……次は、ちゃんと……最後まで、繋がつてください……」

彼女の翼が、逃がさないとばかりに私を包み込む。
長い夜は、まだ始まったばかりだった。

第4章..翼の檻、あふれ出す白濁と愛の味

「……先生。まだ、足りませんよね？」

部屋の明かりを豆電球だけに落とした薄暗がりの中、ハスミが妖艶に微笑む。

先ほどの行為で乱れた呼吸はまだ整っていないはずなのに、彼女の瞳はキラキラと、けれど蕩けるように潤んでいた。

176センチの豊満な肢体が、布団の上でしなやかに動く。

黒い翼がバサリと広がり、逃げ場を塞ぐように私を囲い込んだ。

「せっきの……とっても美味しかったですけど、やっぱり『おかわり』が欲しいです。……」

ね、先生？」

ハスミが覆いかぶさってくる。

視界いっぱい広がるのは、暴力的なまでの質量を誇る二つの果実。

彼女は自分の胸を寄せて持ち上げると、すてに熱を取り戻して昂っている私の中心へとあてがった。

「ん……っ、ふふ。素直な身体……。私の胸、そんなに好きですか？」

むにゅん、と重たい感触がすべてを包み込む。

柔らかいなんて言葉では生温い。まるで吸い込まれるような肉の沼だ。

ハスミは両手で自身の胸を抱え込み、左右から強く、激しく圧迫してくる。

「あつ、んんっ……！ すっごい……硬い……っ！ 胸の形、変わっちゃっ……！」

彼女が腰を振るたびに、視界が白い肌色で埋め尽くされる。

ピンク色の先端が擦れ、唾液とローションが混ざり合った粘液が、卑猥な音を立てて糸を引く。

ハスミの顔が近い。苦しげに、でも嬉しそうに歪んだ表情が、私の理性を削り取っていく。

「先生、先生え……っ！もつと、突き上げてください……っ！私の胸で、イって……っ！」

「ハスミ、くっ……っ！」

「はい、出して……っ！ぜんぶ、受け止めますから……っ！んあぁっ！」

限界が近いことを悟った彼女が、スパートをかけるように胸を押し付け、激しく擦り上げる。

視覚と触覚への過剰な刺激に、私は二度目の解放を迎えた。

「っ、出る……っ！」

「んっ……っ！んん……っ！」

ビクビクと脈打つ飛沫が、彼女の谷間へと迸る。



ハスミはそれを嫌がるどころか、自分の胸を汚す白濁を見て、恍惚の表情を浮かべた。指ですくい取り、ペロリと舐める。

「……………ん。やっぱり、濃いです。……………ふふ、私の胸、先生の匂いでいっぱい……………」



「……………でも。これだけじゃ、お腹いっぱいにはなれません」

ハスミは濡れた胸をそのままに、私を仰向けにさせた。

そして、その長い脚を割り入れるようにして跨ってくる。

騎乗位。

彼女の巨大な翼が天井を覆い隠し、私は完全に彼女の支配下に置かれた。

「先生……………いよいよ、メインディッシュですね」



ハスミが腰を沈める。
濡れそぼった秘所が、先端を捉えた。

「ん……っ、あ………！ お、つきい……っ！ 入って……くる……っ！」

じわり、じわりと侵入していく感覚。

ハスミが上を向いて喘ぐ。

豊かな胸が激しく揺れ、長い黒髪が背中で踊る。

「はあ、あ………っ、奥………っ！ 先生が、私の中に………っ！ つながっ、たあ………っ！」

根元まで収まった瞬間、ハスミはビクリと身体を震わせ、内壁で強く締め付けてきた。
熱い。彼女の中は、外見の理知的な雰囲気とは裏腹に、マグマのように煮えたぎっている。

「うご、きます………ね………っ、んっ！」



彼女が腰を動かし始める。

重力に従って落ちてくる彼女の重みと、吸い付くような肉壁の感触。

ぐちゅ、ぐちゅ、と水音が部屋に響く。

それは、正義実現委員会の副委員長が、ただの雌へと堕ちていく音だった。

(ああ……幸せ……。先生が、私を埋めてる……。美味しい……。もつと、もつと……)

ハスミの思考は白く塗りつぶされていく。

ダイエツトのことも、委員会の仕事も、すべて彼方へ吹き飛んだ。

今あるのは、愛しい人を自分の中に取り込んでいるという、圧倒的な充足感だけ。

「あつ、あつ、んああつ！先生、先生っ！すき、大好き……っ！おかしく、なっちゃ
う……っ！」

「ハスミ、顔、すごいよ……っ」

「見ないで……嘘、見て……っ！私が乱れてるところ、ぜんぶ見て……っ！ああつ、そ
こっ、深い……っ！」



彼女は私の胸板に手をつき、髪を振り乱して腰を打ち付ける。
大きな翼が興奮に合わせてバタつき、風を巻き起こす。

汗と愛液で濡れた身体が、照明を受けて艶めかしく光る。

その姿は、まるで墮天使のように美しく、そして淫らだった。

「先生、もう……だめ……っ！ 私、イっちゃいます……っ！一緒に……っ！」

「ああ、僕も……！」

突き上げる速度を速める。

ハスミの甲高い悲鳴のような喘ぎ声が響き渡る。

理性のタガが完全に外れ、互いに獣のように求め合う。

「あぁっ、んあぁあぁーっ！っ！っ！」

絶頂の瞬間、私は本能のままに腰を跳ね上げた。



けれど、最後の一瞬、私は彼女の中から抜き放った。

「え……っ、あ……っ？」

ハスミが驚いて目を見開く。

その瞬間、私の欲望は、彼女の美しい顔へと降り注いだ。

「んっ……っ!？」

白く熱いものが、彼女の頬に、唇に、そして長い睫毛にかかる。

黒髪にも白い飛沫が散り、そのコントラストが背徳的な美しさを醸し出していた。

ハスミは目を閉じ、降り注ぐ愛の雨を全身で受け止めている。

「はあ、はあ……っ、先生……」

すべてを出し尽くし、私が荒い息をついていると、ハスミがゆっくりと目を開けた。

顔中を白く汚しながら、彼女はとろけきった蕩け顔で、舌なめずりをした。

「……顔にかけるなんて、先生も……いじわるですね」

咎めるような口調とは裏腹に、その声は甘く弾んでいる。

彼女は指先で頬についたものを拭い取ると、それを口に含み、幸せそうに目を細めた。

「んむ……。でも、ご褒美です。……先生のすべて、余さずいただきました」

彼女はべろりと唇を舐め、私の胸に顔を埋めてくる。

甘い匂いと、生々しい愛の匂いが混ざり合う。

「暴食」の彼女は、満たされたようでもあり、けれどまだどこか、次の「食事」を期待しているようにも見えた。

第4章…満たされる暴食、愛液の海で永遠に

「……はあ、はあ。先生、いじわるです。顔中、真っ白……」

ハスミが半身を起こし、私の胸板に手を這わせる。

頬に散った白濁を指先で拭い、それを愛おしそうに口に含む彼女の仕草は、聖女のように美しく、同時に娼婦のように淫らだった。

薄暗い部屋に、くちやり、と粘り気のある水音が響く。

「でも……これだけじゃ、私の空腹は満たされません」

彼女の濡れた瞳が、私の下腹部をじっと見つめる。

そこには、一度吐き出したにも関わらず、彼女の妖艶な手管によって再び鎌首をもたげ始めた熱源があった。

「……ここ。まだ、空っぽなんです」

ハスミが自身の下腹部をさする。

豊満な太もの間、黒く湿った秘所が、どぶどぶと蜜を溢れさせて誘っているのが見えた。

先ほどの行為で開発されきったそこは、早く埋めてほしいと悲鳴を上げているようだ。

「先生の『おかわり』……一番奥に、ください。……いいえ、拒否権はありませんよ？」

バサリ、と音を立てて、ハスミの巨大な翼が大きく広がった。

それはまるで私を逃がさないための檻。

彼女は私を仰向けに押し倒すと、その長い脚を大きく割り広げ、またがり直した。

今度は、顔ではなく、その最も渴いた場所へ導くために。

「……………んっ、う……………！ 入って……………っ、あ……………！」

先端が濡れた入り口を割り、熱い肉壁の中へと侵入する。

二度目の結合。一度目よりも馴染んだその道は、吸いつくような締め付けて私を歓迎した。

「はあ……………っ、あ……………！ 先生、先生え……………っ！ やっぱり、中……………すごい……………っ！」



ハスミが背中を反らす。

根元まで深々と飲み込むと、彼女は恍惚の表情で天井を仰いだ。
規格外の巨乳が激しく揺れ、汗ばんだ肌が照明を弾いて艶めかしく光る。

「動きまです……っ。先生の栄養、一滴も逃がしませんから……っ！」

彼女が腰を上下に打ち付ける。

ぐちゅん、ずぶ、と卑猥な音が部屋の空気を支配する。

正義実現委員会の制服を着ていた時のストイックな姿は、もうどこにもない。
ここにいるのは、愛する男の体液を貪り食らおうとする、一匹の雌だ。

「あつ、あつ、んああつ！ 先生、そこっ……！ 深い、のっ……！ お腹の底、突かれて
るう……っ！」

彼女の動きは激しい。

体重をかけてグラインドするたびに、内壁のひだが私の形を克明になぞり、搾り取るよう

に蠢く。

翼がバタつき、その風圧が私の肌を撫でる。

視界いっぱい広がるのは、快楽に乱れきったハスミの顔と、圧倒的な質量の胸の揺れだけ。

「ハスミ、すごい……締め付けが、強くなってる……っ」

「だって……っ、先生のが、大きくて……っ！私の中、先生でいっぱいになって……っ！
幸せ、すぎて……っ！」

彼女が私の胸に手をつき、覆いかぶせるように顔を近づけてくる。

落ちてくる汗が私の頬に触れる。

長い黒髪がカーテンのように私たちを包み込み、世界を二人だけのものにする。

「先生……好き、大好きです……っ！委員会の仕事も、ダイエットも、今はどうでもいい……っ！先生だけ、先生だけがいれば……っ！」



「僕もだよ、ハスミ……っ。君のすべてが愛おしい」

「っ、あ………！嬉しい、です……っ！もつと、もつと言って……っ！愛して、ください……っ！」

言葉を交わすたびに、腰の動きが加速する。

互いの体温が溶け合い、境界線が曖昧になっていく。

理性などどうに消し飛び、残っているのは互いを求め合う獣のような本能だけ。

「あつ、もう、だめ……っ！先生、きちやう……っ！私、また……っ！」

「僕もだ、ハスミ……っ！出すよ、中に……っ！」

限界が訪れる。

ハスミは私の言葉を聞くと、嬉しそうに微笑み、そして強く、強く抱きついてきた。

「はい……っ！ください……ッ！先生の命、ぜんぶ……私の子宮（なか）に……っ！……っ！」



「っ、うあああ——っ！！！」

最奥まで突き上げ、熱い奔流を解き放つ。

ドクドクと脈打つ自身から、白濁した熱が彼女の胎内へと注ぎ込まれる。

ハスミの身体が弓なりに跳ね、内壁が痙攣して私のものを噛み締めるように収縮する。

「んぎいっ……！ ああっ、あああ……っ！ 熱い、熱いの、来てるう……っ！ お腹、いっぱい……っ！」

彼女は白目を剥きかけながらも、快感の波に翻弄され、喉を鳴らして絶頂を受け入れていた。

注がれる感覚、満たされる感覚。

それは彼女にとって、どんな高級なスイーツよりも甘美で、魂を満たす「食事」だった。



長い、長い余韻。

嵐が過ぎ去った後のような静寂の中、荒い呼吸音だけが重なる。

ハスミは私の体の上に力なく突っ伏し、その大きな翼で私を包み込んでいた。

「……………はあ、はあ……………。先生……………」

彼女が顔を上げ、とろんとした瞳で見つめてくる。

汗で濡れた前髪をかき上げてやると、彼女は猫のように目を細めて私の掌に頬を擦り寄せた。

「……………全部、入っちゃいましたね」

「ああ……………すごかったよ、ハスミ」

「……………ふふ。温かいです。先生が、私の中に残ってる……………」

彼女はまた繋がったままのそこを意識するように、腰を小さく揺らす。



ぬぶ、という音と共に、溢れ出た白濁がシーツを汚した。

「気持ちよかったです、先生。……今まで生きてきた中で、一番……甘くて、幸せな味でした」

「僕もだよ。ハスミとひとつになれて、本当に幸せだ」

私が抱きしめ返すと、ハスミの翼がぎゅっと私を締め付けた。

その力強さは、決して離さないという独占欲の表れであり、深い愛の証だった。

「……先生。お腹はいっぱいになりましたけど……」

ハスミが私の首筋に唇を寄せ、甘えた声で囁く。

「……朝ごはんも、一緒に食べてくれますよね？……もちろん、そっちの『食事』も、ですけど」



彼女は悪戯っぽく微笑み、私の胸にキスを落とした。

この食いしん坊で愛らしい副委員長との夜は、まだ明ける気配がない。

温泉の湯気よりも熱く、餡子よりも甘い蜜月は、これからも続いていくのだと——私は彼女の翼の中で、幸福な予感に包まれていた。

エピローグ…日常に溶け出す甘い毒、暴食の続きはあなたの部屋で

トリニティの放課後。夕闇が迫る頃、シャーレのオフィスに控えめなノック音が響いた。

扉を開けて入ってきたのは、いつもの正義実現委員会の制服に身を包んだハスミだ。

けれど、その表情は委員会の副委員長としての凛としたものではなく、どこか潤んだ、甘い空気をまとった「一人の女性」のものだった。

「……先生。お疲れ様です。……差し入れ、持ってきました」

彼女が掲げたコンビニの袋からは、甘いお菓子の匂いが漂っている。

あの温泉旅行から数日。私たちは日常に戻っていた。

けれど、ふとした瞬間に視線が絡むだけで、あの夜の熱気が蘇り、肌が粟立つような感覚

に襲われる。それは彼女も同じようだった。

「……ふう。やっぱり、先生の顔を見ると……落ち着きますね」

ソファに隣り合って座り、買ってきたシュークリームを食べる。

ハスミは大きな翼を畳んで少し窮屈そうにしているけれど、その距離は以前よりも明らかに近かった。

太ももが触れ合い、体温が伝わってくる。

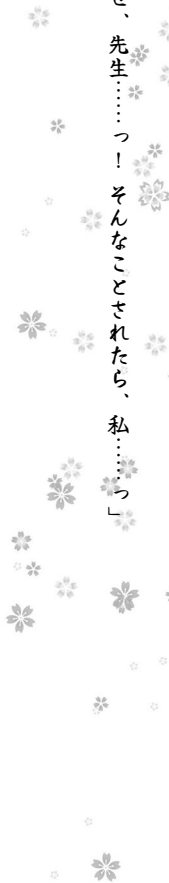
「ん……っ、クリーム、美味しい……」

ハスミがシュークリームにかぶりつく。

溢れ出たカスタードクリームが、彼女の唇の端についた。

それを私が指で拭って口に含まむと、ハスミの顔がぼん、と音を立てるように赤く染まった。

「……っ！せ、先生……っ！そんなことされたら、私……っ」



彼女の瞳が揺れる。

口元の甘さなどどうでもよくなるほど、目の前の「先生」という存在が、彼女の食欲と性欲を刺激していた。

「……あの旅行以来、ずっと……お腹が空いてるんです。いくらスイーツを食べても、満たされなくて……」

ハスミが食べかけのシュークリームをテーブルに置き、私の手を両手で包み込んだ。大きく、温かい手。その掌は微かに汗ばんでいる。

「……先生のせい、ですよ？ 私に……あんな『美味しい味』を教えたんですから……責任、取ってくださいね？」

彼女は妖艶に微笑むと、私の手を自分の豊かな胸元へと導いた。制服の生地越してもわかる、圧倒的な弾力と熱量。



心臓の鼓動が、トクントクンと速いリズムで掌を叩く。

「……ここで、続き……みましょうか。誰も来ませんから……」

ハスミは自らブラウスのボタンを外し始めた。

プチ、プチとボタンが外れるたびに、抑え込まれていた白い双丘が解放され、空気を求めて弾み出る。

黒いレースのブラジャーなど飾りにもならないほどの質量が、目の前に露わになった。

「……先生。いただきます」



「んっ、あ……！ お、つきい……っ！ やっぱり先生の、すごい……っ！」

ハスミは私の足の間に跪き、自身の胸で昂った熱源を挟み込んでいた。



いわゆるパイザリの体勢。

けれど、彼女の場合はそのサイズが規格外だ。
挟むというよりは、もはや「埋める」に近い。

「見えますか、先生？ 先生のが……私の胸の中で、溺れてます……っ」

彼女が楽しそうに、そして苦しそうに喘ぐ。

両手で自身の胸を抱え込み、左右から強くプレスするように押し潰す。

柔らかい肉の壁が、私の形に合わせて変形し、吸い付くように絡みつく。

ピンク色の先端同士が擦れ合い、そこに私の先走りと彼女の唾液が混ざり合い、ぬちゅぬちゅと卑猥な音を立てていた。

「あっ、んんっ！ 硬い……っ！ こすれて、気持ちいい……っ！ 私の胸、先生の形で……
変になっちゃいそう……っ！」

ハスミが顔を近づけてくる。



上目遣いの瞳は情欲でとろけ、長い黒髪が私の太ももをくすぐる。
彼女の吐く息が熱い。

「暴食」の彼女にとつて、これはただの奉仕ではない。

愛する人の一部を、自分の最も誇れる武器で味わい尽くす、至高の食事なのだ。

「先生、先生え……っ！ もっと、硬くしてください……っ！ 私の胸で、イッて……っ！」

彼女が腰を振る速度を上げる。

視界いっぱい広がる白い肌の波。

翼がバタバタと震え、彼女の興奮を伝えてくる。

圧迫感と摩擦、そして視覚的な暴力に、理性の堤防が決壊する。

「っ、ハスミ……出る……っ！」

「はい……っ！ 出して……っ！ 私の胸に、たっぶり……っ！」

「うああっ！！」



ドクン、と熱い衝動が迸る。

白濁した飛沫が、彼女の美しい谷間へと勢いよく放たれた。

「んっ……！ ああっ……！ あったかい……っ！」

ハスミは飛び散るそれを避けることなく、むしろ胸を突き出して受け止めた。白い液体が彼女の肌を汚し、谷間を伝って流れ落ちる。

その光景を見て、ハスミはうっとりとして目を細め、舌なめずりをした。

「……ふふ。先生の匂い……すごい……」

彼女は指ですくい取ると、それを口に含み、あめ玉のように転がした。

「……ん。甘い……。でも……」



ハスミは濡れた瞳で私を見上げた。

その瞳の奥には、まだ消えていない、いや、さらに燃え上がった飢餓感が揺らめいていた。

「……前菜だけじゃ、やっぱり足りません。……先生？」

彼女は立ち上がり、スカートのホックに手をかけた。

パラリと落ちる布地。

露わになった下着には、すでに広範囲にわたって染みが広がっていた。

「……こんなに濡らして、待ってたんです。……一番奥の、特等席に……『おかわり』、注いでくれますよね？」

ハスミはソファに私を押し倒すと、その長い脚を割り開き、またがった。逆光の中で広げられた黒い翼が、墮天使のようなシルエットを描く。

「……入ります。先生……」



彼女が腰を沈める。

濡れそぼった秘所が、先端を飲み込み、ずぶりと音を立てて根元までを迎え入れた。

「んああっ……！ おっ、くう……っ！ 入ったあ……っ！ 先生が、私の中にい……っ！」

ハスミがのけぞる。

結合した部分から、脳を溶かすような快感が奔流となって駆け巡る。

彼女の中は、まるで溶鉱炉のように熱く、そして締め付ける力が強烈だった。

旅行の時よりも、さらに貪欲に、さらに深く求めてきているのがわかる。

「うご、きます……っ！ んっ、あっ、ああっ！」

ハスミが腰を上下させる。

重力に任せた激しいピストン。

バサ、バサと翼が風を切り、彼女の豊かな胸が激しく揺れる。



汗と愛液の匂いが充満し、ここはもう神聖な学園のオフィスではなく、ただの雄と雌が交わる巣になっていた。

「先生、先生えっ！好き、大好きい……っ！頭、おかしくなるう……っ！」

「ハスミ、ああっ、すごいよ……っ！中、うねってる……っ！」

「だって、嬉しいから……っ！先生と繋がってて、幸せだから……っ！ああっ、そこっ、深いいいっ！」

彼女は私の胸板に手をつき、髪を振り乱して腰を打ち付ける。

理知的な瞳は完全に裏返り、口からは涎が垂れているのも気にせず、ただひたすらに快楽を貪る。

「……っ！もう、だめ……っ！先生、また、きちやう……っ！お願い、中……っ！中に出してえ……っ！」

「出すよ、ハスミ……っ！」



二度目の限界。

彼女の願いに応え、私は彼女の最奥へとすべてを叩きつけた。

「んぎいいいーっ！っ！っ！」

ハスミが絶叫し、背中を弓なりに反らす。

ドクドクと注ぎ込まれる熱い種を、彼女の子宮口が吸い付くように受け止める。

内壁が激しく痙攣し、最後の一滴まで搾り取ろうと締め付けてくる。

「ああっ、熱い……っ！ 先生の、入ってきてるう……っ！ お腹いっぱい……っ！ 幸せ
え……っ！」

長い、長い絶頂の余韻。

ハスミは私の体の上に崩れ落ち、荒い息を吐きながら、けいれんする身体を私に預けていた。





「……はあ、はあ。……ごちそうさまでした、先生」

しばらくして、ハスミが顔を上げた。

汗で額に張り付いた髪を払い、とろけきった笑顔で私を見つめる。

その表情は、極上のディナーを終えた後のような、深い満足感に満ちていた。

「……ふふ。これでまた明日から、委員会のお仕事頑張れそうです」

彼女は私の頬にキスを落とすと、私の耳元で小さく囁いた。

「……でも、お腹が空いたら……また、『補給』しに来てもいいですか？……先生という、私だけの特別なスイーツを」

彼女の翼が、私を優しく包み込む。



その甘く、重たい愛の檻から、私が逃げ出すことなど永遠にできないだろう。そして、逃げ出したいとも思わなかった。

日常に戻っても、私たちの甘い「共犯関係」は続いていく。
ハスミの止まらない食欲と、尽きない愛欲を満たすために――。

く完く

